

批評と紹介

ライオネル・ヂヤイルズ氏編「大英

博物館所藏敦煌出土支那寫本目錄」

Lionel Giles: Descriptive Catalogue of the
Chinese Manuscripts from Tun-huang in the
British Museum. Pp. XXV + 334 12 × 28.5 cm.
London: The Trustees of the British Museum
1957

榎 一 雄

本書はスタインがその第二回の中央アジア探検(一九〇六—一九〇八)において、敦煌の千佛洞から將來し、大英博物館に納めた支那寫本八千八百二十二點と刊本二十點、計八千二百二點の目錄である。内容は、(一)佛教關係、(二)道教關係、(三)マニ教關係、(四)宗教に關係ないテキスト、(五)刊本の五部に分かれている。この中(一)佛教關係として分類されているものは、計

六千七百九十餘點であるが、それは又(1)大藏經所收の經論律、(2)それに入らぬもの、(3)疏以下の十二項目に分けられ、(四)宗教に關係ないテキスト(七〇五四A—八〇八二C)は(1)儒教の古典(經)、(2)歴史、(3)地志以下二十二項目に分かれ、計九百三十餘點を數える。同一寫本に二つ以上の種類の異つたものが含まれている場合は、原番號にABC等の記號を加えてその異つたものを記録しているので、この目錄に記されている總數は寫本・刊本の合計八千二百二點より若干多くなつてゐる。但しこの目錄に記されている各寫本の番號は、この目錄における分類の番號であつて、大英博物館での整理番號はS.何番となつてゐる。(支那語テキストと中央アジア語テキスト等が同じ寫本に並存する場合、即ち所謂 Bilingual Manuscripts は Or. 何番となつてゐる。Or. は Oriental Manuscripts の略である。又、刊本の場合は P. 何番となつてゐる。P. はいつまでもなく Printed Books の略である。)それはこの目錄に一々注せられてゐるし、卷末に目錄の分類番號と整理番號との對照表がつけられている。従つてこれら寫本の實物や、マイクロフィルム複製から必要なものを檢出する場合は、本目錄の分類番號ではなく、整理番號によりなければならない。

各寫本は(一)書名、(二)奥書、(三)書體の善惡及び書寫の推定年

代、(a)紙質、(b)長さ、(c)参考文献又は参考記事の各項目について記述され、巻末に固有名詞及び稱號・職名等の索引がつけられている。その分類の方法、書名の比定、書寫の推定年代等については、議すべき點が少くないし、参考文献や記事の擧げ方についても補うべきことが多いと思われるが、しかし何よりも重要なことは、これによつてスタインが敦煌から將來した支那寫本の内容が全體的に明かにされ、文書の利用が非常に便利になつたことである。個々の記載については、この目錄を基にして原寫本を検出研究して、補正を加えて行けばよいのである。そして文書を保管している大英博物館東洋刊本寫本部 (Department of Oriental Printed Books and Manuscripts, The British Museum, London W.C.1) は、たとへどんなに簡單なもので、これらの寫本についての、又はこれらの寫本を利用した研究結果の送付を希望している。

これらの寫本類が大英博物館に納められたのは一九〇九年一月のことである。そして、一九一四年、デニス・ロス (E. Denison Ross) が大英博物館一級助手 (Assistant of the First Class) に任命されて、支那文及びウイグル文寫本の研究整理に當ることになつた。當時インド政府の記録局長 (Keeper of the Records of the Government of

India) であつたデニス・ロスは、スタイン將來品の學問的研究への興味を思い切ることが出来ず、有利なインドでの地位を捨て、歸國し、大英博物館に奉職したが、僅か四ヶ月で第一次世界大戰が勃發し、軍事省 (War Office) に出仕して郵便物の檢閲に當ることになり、續いて一九一六年十月からは新設の東洋學校 (School of Oriental Studies) の校長としてその經營に當ることになつたため、實際には殆ど整理に従事する餘裕がなかつた。やがて、一九一九年、ライオネル・チャルズ氏が助手に着任し、爾來三十有餘年、専心整理に従つてここにこの目錄を完成したのである。チャイルズ氏は一九四〇年退職したが、その後も囑託として目錄の編纂に従事し、一九五二年の末には略々原稿が完成して印刷に廻されたが、なほ若干追加を必要とする部分があつたのを、現部長のガードナー (K. B. Gardner) 氏等が補つて、今の形にまで仕上げたのである。チャイルズ氏は一九五〇年前後からとかく健康がすぐれず、ハートフォードの自宅に靜養しているが、本書の刊行を誰よりも喜んでゐるのは氏自身である。私は心から氏に敬意を表するとともに、その自愛を祈りたい。

ここに著録されている文書のすべては、一九五三―五四年大英博物館の好意によつてマイクロフィルムに複寫され、東

洋文庫に收められた。當時、博物館當局と直接交渉の任に當り、滯英後半期の殆どすべてを文書撮影の監督に費した私は、この目録に接して更めて當時のことをいろいろと回想させられる。私自身は不幸にして未だ文書を十分利用する機会を有しないが、東洋文庫の年來の計畫である敦煌文書の組織的な印刷行が實現されて、文書が出来るだけ多くの人々に利用されること、更にパリの國立博物館やドイツ・北京に收藏されている關係文書のマイクロフィルム化が實現されて、それらのすべてが日本で容易に見られるようになることを切望している次第である。

なほこの目録に著録されている文書については、我が國で更に詳しい目録が編輯せられつゝあるし、支那本土ではこれとパリその他のものを併せた敦煌遺書總目索引(王重民・劉銘恕編、商務印書館刊)の出版が予告されている。又、舊インド省圖書館所藏の敦煌文書(これはチベット語その他中央アジア言語の文書が主で、支那文のものは極めて少い)の目録も目下印刷中である。これらが出揃えば、所謂敦煌文書の全貌はいよいよ明かにされるであらう。

註

(1) この間の事情はチニスン＝ロスの自敘傳に詳し(Both Ends of the Candle, the autobiography of Sir E. Denison

Ross, with a foreword by Laurence Binyon. London: Faber and Faber 1943 pp. 13, 115, 165)。この自敘傳が著者自身の經歷を記したものであることは言うまでもないが、更に興味のあるのは、著者と交際のあつた歐洲諸國の東洋學者の消息が少からず記されていることで、著者はこれら知名の學者との交友を頗る誇りにしていたかの印象を受ける。その中にルックがデニスン＝ロスにあてて大谷探検隊の將來品の解讀や橋端超師のことを論じた手紙があるので、参考のために書き出して置く。中に見える日本人に學的能力十分になしという説など、今日でもなお歐洲人の間に牢固として抜き難い考え方である。

Berlin, 29 January 1910

.....Your notice concerning the Japs I have read with very great interest. I take it, the Uighur things you saw were part of Otani's "pilgrimage"? It will be a very nice feat to identify it and I do wish those Japs would turn the editing of their things over to yourself, for I do not think, to judge from what I have seen of the average, that they have a sufficient amount of staying power in science: they are warriors and surely some of their deeds and views in that *métier* are quite capable of warming your blood with sympathy and admiration. Yet it is well never

to forget that they love none but themselves; that they are being devoured with ambition. Also: no Italian of the Cinquecento was a greater adept at deep and deadly hypocrisy and intrigue, and to statesmen I would say: Use them if you can, but be careful of not being used yourselves.

Berlin, 23 August 1910

My dear Ross,

.....Tachibana was here a few days ago. Jove! He was in luck not to have fallen into one of those wagon ruts in the Turfan loess-soil; he could not have got out of it again. Otherwise he is a fine little chap, and I think will become a most useful member of the Turfanite crowd. Sharp enough of wit he undoubtedly is, and his being a Buddhist priest gives him a tremendous pull.

(Both Ends of the Candle, pp. 106—107)

前の手紙に「十六世紀のイタリヤ人がどんなに偉くても」あるのは、マキヤヴェリ(Niccolò Machiavelli 1469—1527)を指しているのであらう。また「利用出来るものなら、利用して御覽なさい」といふ結びの句のイタリックスは、原文に従ったものである。

イタリア中東亞研究所刊の 新雑誌「支那」

Cina, Vols. 1—3 (1956—1957). Pp. 186, 104,
136 Roma: Istituto Italiano per il Medio ed
Estremo Oriente (Prezzo L. 1,200 : 550 : 1,100)

榎 一 雄

ローマ大學のパテック教授からラディオオレヴィジオーネ「イタリヤ」での連続放送を纏めた「支那文明の歴史的側面」(Luciano Petech: Profilo storico della civiltà cinese. Pp. 220+ (1) Pts. I—XXI Roma: Edizioni Radio Italiana 1957)を贈られて面白く讀んだが、その中に「支那」といふ雑誌が引用されているので、問合せた所、教授の斡旋で既刊號三冊が中東亞研究所から送られて來た。この研究所刊の雑誌「東と西」(East and West)はよく知られているが、「支那」はまだ日本では餘り知られていないと思われるので、ここに簡単に紹介する。